

## 今読む『方丈記』

山村 福子

### 著者略歴

鴨長明 かものながあきら (ちょうめい)

1155 (久寿 2) 年、下鴨神社の正祢宜である鴨県主長継の次男として生まれる。7歳で従五位下に叙され菊丈夫と号す。18歳の頃、有力者であった父が病没。最大の庇護者を失い以後出世の道が閉ざされる。和歌を源俊恵に、琵琶を中原有安に学び、才能を発揮。歌人として認められ宮廷内外の多くの歌合や歌会に出席。45歳頃には和歌所の寄人に任命されている。後鳥羽上皇の信任が厚く、長明が望んでいた下鴨神社の摂社、河合社 (ただすのやしる) の祢宜に推されたが、当時の鴨一族の有力者の反対によって実現しなかった。この事件を機に出家。大原に5年余過ごした後、54歳の頃、日野山に移り方丈の草庵の暮らしを始める。『方丈記』『無名抄』『発心集』等を執筆。1216年 (建保4) 年没。法号蓮胤。

### 『方丈記』の構成

- ・ 「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある人と栖と、またかくの如し。(後略)」

### ・ 五大災厄

1. 大火 1177 (安元3) 年 長明 23 歳
2. 辻風 1180 (治承4) 年 26 歳
3. 遷都 同年
4. 飢餓 1181~82 (養和元~2) 年 27~28 歳
5. 地震 1185 (元暦2) 年 31 歳

- ・ 世間にある人々とその栖の不定。長明自身の辿ったくらしと住居の変化。出家、遁世に至った経緯と草庵での“清貧の生き方”の様。

- ・ 死が近いことの予感から、草庵のくらしで得た心の安らぎへの反省。